速報！

上田早苗先生への質問と先生からのご回答

シンポジウムで出されたご質問に対し、上田先生からご回答をいただきました。

■ 初級者向けビジネス日本語教育はお考えですか。メリットがあると思いますか。

● 私が所属する学科で開講している初級日本語コースに関してお話ししますと、日本研究専攻の学生の場合は、必修である3年次の日本留学中、学生として順調に生活を送れるようにするのが目的です。また、圧倒的に数が多い非専攻生の場合は、学習目的も多様で、必ずしも卒業後に日本語を使って仕事をしたいという学生ばかりではないので、現時点では初級レベルのビジネス日本語コースは開講していないというのが現状です。しかし、将来的に学生からのニーズが高まれば、初級から仕事の場で使う日本語を意識して教えることはもちろんメリットがあると思います。

■ 敬語の指導の中で一番力をいれているところは、どのようなことでしょうか。

● 私がビジネス・ライティングを教えているのは1年間の日本留学を経験した学生ですが、留学中に実際に敬語を使う機会はあまりなかったと言っています。学生たちが知識としては知っている敬語を、ビジネス文書の中でどのように運用できるかということを教えたいと思っています。

■ 「ビジネス日本語」の教科書で時々違和感を感じることがあります。（例：丁寧すぎる）　授業の中で、「実際はこのように言っている」と別の表現を提示することはありますか。（私は30年間ビジネスの世界にいました。）

● 私が教えているのはビジネス・ライティングですので、授業で扱っている文例はかなり丁寧なものだと思います。ただ、送る相手が親しい同僚なのか上司なのか、あるいは取引先の方かによって異なるということは文例とともに示しています。

■ ビジネス会話と敬語以外に、日本社会でのマナーや上下関係などの文化的なところはどのように教えていらっしゃいますか。

● 特に香港と日本で異なると思う点（例：お世話になった時、後日改めてお礼の言葉を述べる）については、初級レベルでも折にふれて媒介語を用いて説明しています。

■ 成績評価はどのようにされていますか。

● 宿題（20%）、発表（20%）、期末テスト（35%）、Take-home Exam（20%）、平常点（5%）です。宿題、期末テスト、Take-home Examは、授業で扱ったビジネス文書から出題します。発表は、新商品の企画案について、社内の会議でプレゼンテーションをするという設定で行います。

■ 書く練習をメインで教えていらっしゃる中、学生さんに飽きさせないためには、どのような工夫をされていますか。

● 当たり前のことですが、書くことも話すことと同じようにコミュニケーションの手段であるということを実感させることが一番大切だと思います。ビジネス文書はまさに、具体的に相手がいて、何かを伝えるために書くものですから、「これを学べば実際に仕事で使える」ということを感じてもらえれば、学生のモチベーションは高まります。そのほかに、時には情報誌などの生教材から文例を提示したり、文書作成の作業をグループで話し合いながら進めさせたりすることなども、学生が楽しんで勉強する助けになっていると思います。

■ 御校のビジネス日本語コースはとても定評があります。異文化調整能力に関わる授業をまとめて行う機会などはありますか。

● 日本語ができない学習者でも履修できる一般教養科目として「日本語と日本文化」というコースが、また初級日本語コースを修了した学生を対象とした「日本語と日本社会」というコースがあり、いずれも香港人教員が広東語で教えています。これらのコースの一部として取り上げられていると思います。

■ 文例の真似だけと感じる生徒さんが納得した質問とは、他にどのような具体例がありますでしょうか。

● 「決まった表現を使いこなせれば、日本語が上手だと評価される」と地道に説得しています。そのほかに、学生には「何か独創的なことをしたい」という希望があると思います。新商品の企画書や発表用のパワーポイントの作成は、そのような学生の希望に合った課題ではないかと思います。

2014.8.3